

3 第3学年の取組

(1) 実践内容「人にやさしい町づくり」

① はじめに

3年生は、社会科で地域について学習する。公共施設の見学や町の探検を通して、甚目寺にあるたくさんの優しい工夫に気付いた。そのことをきっかけに、総合学習では、みんなの幸せ＜福祉＞について考えていくことにした。「みんな」の中には、児童にとって身近な家族や友達だけでなく、普段かかわる機会の少ないお年寄りや体の不自由な人などもある。そこで、福祉実践教室や老人福祉施設への訪問など体験学習を取り入れながら、立場の違う人の考え方や接し方を知り、理解を深めていきたい。その上で、今自分にできることは何かを考え、行動するための力を育みたいと思い、実践を進めることにした。

② 「人にやさしい町づくり」

地域に関心をもって進んで学び、学習したことを分かりやすく発信できるようにするために他教科と関連を図りながら総合学習を進めた。学習においては、4人を基本とした小グループで活動し、協力して課題を解決するようにした。また、誰に対しても思いやりをもって接することができるよう、道徳の時間や日々の生活の中で、心の教育について意識して取り組んだ。

ア 社会科

「わたしたちのまちのようす」を調べるために、小学校を中心とした東西南北のコースを探検した。総合学習と絡めて町の中の優しい工夫についても探そう伝え、歩道橋や点字ブロック、ブランコの前に設置された柵など、普段は気にすることのなかったものに目を向け、多くの発見をすることができた。また、出会う人には挨拶など自分から積極的に声をかけてかかわるようにすると、どの人も温かく対応してくださり、町の人の優しさにも気付くことができた。

- ① ブランコのさく
- ② 小さい子どもにして
- ③ うごいているブランコに
近づかないようにさくか
ある。

【町で見つけた優しい工夫】

公共施設の見学では、福祉会館に注目させた。ここは、館内の図書室を除けば、児童にとってほとんどなじみがなかったが、よく見ると、お年寄りや体の不自由な人、赤ちゃんを連れた人など、様々な人が出入りしており、誰にとっても利用しやすい工夫がされていることに気付くことができた。

5. 感想
みんなのために、町下のいろいろなところに行き、いろいろなことをしました。わたしたちの町は、すこいな町だと思います。

【探検後の振り返り】

イ 国語科

「よい聞き手になろう」や「つたえよう、楽しい学校生活」の単元では、場面に合った話し方や相手にとって気持ちのよい聞き方、進行にそって話し合う方法などを学んだ。また、『ありがとう』をつたえよう」の単元では、手紙やはがきの正しい使い方を学習したことで、お世話になった講師の先生へのお礼の手紙に活用することができた。

さいわいなきまつか
 はんのうするくらべて
 くらべて
 ちきとちきで
 くらべに
 つけたしで
 わたしも
 くらべと同じで
 くらべがわからない
 ので教えてくださる
 なるほど
 うんうん
 ーです。

【話し合いをして決定した学級の課題】

ウ 道德

「おばあさん」や「心と心のあく手」の資料を用いて、思いやりや助け合いについて考えた。登場人物の気持ちと照らし合わせて自分だったらどう行動するかと考えることで、本当の思いやりとは、自分がしたいことをするのではなく、相手のことを考えて行う行為であることに気付くことができた。(③に詳細を記述)

エ 総合的な学習の時間

(ア) 福祉について知ろう

みんなの幸せ＜福祉＞について知るために、周りの人に幸せだということについてインタビューをしたり、社会科の学習から展開して、身の回りにあるユニバーサルデザインを探したりする活動を行った。これらの活動から、なじみのなかった福祉という言葉を身近に感じられる児童が増え、もっといろいろな福祉について知りたいと関心を高めた。

(イ) 福祉実践教室で学んだこと

下記のような体験学習の場を設定した。学びの場を広く提供したいという思いから、選

挾制ではなく、ほとんどの講座が全員の子に体験できるようにした。どの児童も実際に活動したり講師の方と直接触れ合ったりすることができ、様々な立場の人の気持ちを理解することにつながった。

a 高齢者疑似体験

高齢者疑似体験キットや軍手を使い関節を曲げにくくしたり、水中眼鏡で視野を悪くしたりして、高齢者を体験した。実際にその体で歩いてみたり、文字の読み書きをしたりすると、多くの不便さがあることが分かった。



b 手話

聴覚障害者の講師の方が、実際に手話を使って話を始めると、どの子も真剣に聞き入った。通訳の言葉以上に、講師の方の姿そのものから気持ちを読み取ろうとしているようだった。また、手話自体がその物の特徴をまねることから考えられているため、比較的覚えやすく、興味をもった児童が非常に多かった。

【手足の曲げ伸ばしがうまくできないことの体験】

c 点字

点字器を使い、自分の名前や簡単な文章を書いた。点筆でへこみを付けて文字を作っていく作業を楽しそうに行っていたが、何種類もある中から自分の書きたい文字を探すのは一苦労だった。また、点字を右から左へ打つというやり方が慣れないため、間違えて打ってしまう子もいた。今回、点字を読むところまではいかなかったが、正確に打つことは、目が見えていても難しいと実感できた。また、今までは点字に対して、ただのブツブツしたものという認識でしかなかったが、点字は目の見えない人にとっての大切な文字であることを学ぶことができた。

d ガイドヘルプ

二人一組になって、ガイドする側・される側を体験した。視覚を奪われると、手探りで進むようになるため、どの子も動きがゆっくりになった。普段生活の場である学校内を歩いていると、「あれ、もう階段なの？」「曲がり角はどこ？」と、見えているときと距離感が違うことなども分かり、安全に歩くためには手助けしてくれる人が必要であることを痛感した。一方、ガイドするときには、自分が見えるがゆえにずさんな部分が目立ったが、少しの段差も怪我につながることや、手すりがあるところではガイドされる者を手すり側にするとよいことなどを教えてもらおうと、一つ一つの行動が丁寧で思いやりのあるものになっていった。

e 車いす

車いすユーザーの講師の方から、体験に基づく様々な話と、車いすの使い方の講習をしていただいた。中でも、講師の方自身がされてとても嬉しかったことの話の聞くと、自分もそのような思いやりのある行動ができる人になりたいと、思いを強くしていた。

f 盲導犬

中部盲導犬協会に出かけ、訓練の様子を見学させてもらった。盲導犬が周囲の音や様子から危険を察知し立ち止まったり、体を前に入れて知らせたりして、常に人を安全に誘導する姿を見ると、思わず歓声が上がった。初めは盲導犬を触りたいという気持ちの児童も多くいたが、盲導犬が立派に仕事をする様子を見たり、盲導犬ユーザーの方が盲導犬を大切に思う気持ちを知ったりするうちに、盲導犬を見守り応援したいという気持ちに変わっていった。

(ウ) 自分たちにできることをしよう

a 総合学習発表会

これまで学習してきたことの中から発表したいテーマを選び、同じテーマを選んだ者同士でグループを作り準備を進めた。劇やポスターセッション、参観者を交えた体験型、クイズ形式など、それぞれの内容に合わせて発表の仕方を工夫した。総合学習を始めたときから問い続けてきた、「みんなが幸せになるために、自分にできることは何か」という大きなテーマに対し、どのグループも発表の中で自分たちなりの考えを示すことができた。また、当日福祉実践教室でお世話になった講師の方々が見に来てくださると、どの児童もとても嬉しそうに迎え、発表にも一層気合いが入った。



【保護者を交えて体験型の発表をするグループ】

b デイサービスセンター「銀羊苑」の訪問

総合学習発表会を終え、高まった児童のモチベーションを、銀羊苑の訪問につなげた。総合学

習を始める前に比べ、児童は、お年寄りや体の不自由な人に「～したい」という具体的な思いをもつようになっていく。この銀羊苑の訪問は、そうした思いの実現の場になると考えた。これまでの話し合いから、お年寄りの体を配慮し、お年寄りに親しめるようにと、いろいろ気を配りながら内容を考えることができた。訪問は2月に実施した。

③ ESD道徳「心と心のあくしゅ」

ア 導入の様子

「思いやり」や「親切」と聞いて思い浮かぶことを自由に発表させた。助け合い、協力すること、困っている人に優しくすることなど、たくさんの意見が出てイメージが膨らんだところで、本時のめあて『『本当の思いやり』について考えよう』を提示した。「本当の」という言葉に、「おや？」と思わせたところで、資料の範読に入った。

イ 展開の様子

資料を意図的に前半と後半に分け、男の子が足の不自由なおばあさんに対しどうしていいか迷っている前半部分で範読を切った。内容を把握する段階では、特に、おばあさんが荷物を持つという男の子の申し出を断った背景に、歩く練習をするという事情が絡んでいるかもしれないということや、数日後またおばあさんに出会った男の子が、汗をにじませながら一生懸命歩く姿を見て、どうしたらよいか悩み葛藤している気持ちを、しっかりと押さえた。また、児童が、男の子の立場により自分を近づけて考えられるよう、それぞれの場面ごとに「みんなだったらどう思う」「同じような経験をしたことがある人はいますか」と、自分と照らし合わせられるような声かけをした。

「自分だったらどう行動するか」という問いに対し、児童は実に様々な答えを示してきた。初めのうちは単純に「やっぱりもう一度声をかける」と書いている子も何人か見受けられたため、「歩く練習をしているおばあさんにとって本当に嬉しい行為ってどんなものなんだろうね」と揺さぶりをかけた。すると、「汗を拭いてくださいと言ってハンカチを出す」「石につまずかないようにおばあさんの前を歩く」「おばあさんの邪魔にならないようにそっと見守って、大変そうだったり転びそうだったりしたら声をかける」などの意見が出た。また、もう一度声をかけると書いた児童も、「それでも断られたら、気を付けて歩いてくださいねと言う。歩く練習頑張ってくださいと言う。家まで一緒について行く」と自分なりにどうしたらおばあさんのためになるかを考えて答えることができていた。後半部分を読むと、男の子も悩んだ末に、おばあさんが家に着くまでそっと見守りながらついて歩いたことが分かった。



【友達の考えを聞き合う場面】

ウ 終末の様子

最後に、「本当の親切」とは何かを問いかけた。児童からは、「相手のためになるお手伝いをする」「その人がしてほしいことをすること」「相手のことを考えて助け合うこと」などの意見が出た。ただ、この問いは難しく、導入時と変わらず「困っている人を助けること」や、今回の資料にこだわって「そっと遠くから見守ること」と答える児童もいたため、意図的指名を行い、大切なのは、自分がしたいことではなくその人がどうしてほしいかを考えて行動することであることを気付かせた。

(2) 実践の成果と課題

3年生という学年は成長期に差し掛かり、自我が明確に出始める時期である。そのため、つい自分の気持ちを優先させて強く自己主張をしてしまう子も少なくない。しかし、その中でも、この一年福祉にかかわる学習を行ってきたことは心の成長を促し、お年寄りや体の不自由な人に限らず、友達の間でも、困っていたら自然に声をかけ優しく接しようとする姿につながっている。また、その接し方についても、以前は自分の「手伝いたい」「助けたい」気持ちばかりで、おせっかい行為になってしまうことが多々あったが、道徳の学習で学んだ、相手がしてもらって嬉しいことやその人のためになることを考えて行動できる児童が増えた。

今回いろいろな場面で話し合いの機会を取り入れてきたことで、友達の意見に反応を示しながらよく聞くことができるようになった。また、相手の意見を認めながら、自分の意見についてもきちんと伝えられるようになってきたことも大きな成果である。